

『発電所のねむるまち』

マイケル・モーパーゴ 作 あかね書房



読んだあと、「あなたはどうか？」と問われているような気がします。

イギリス・ロンドンから50マイルほど離れたところにある海辺のまち、ブラッドウェル。少年マイケルは、お母さんと二人で暮ら

しています。ある日、ケガをしたマイケルは、ペティグルーさんというタイ人の女性に助けられます。ペティグルーさんは防波堤そばに広がる美しい自然豊かな湿地に、暮らしています。マイケルは優しいペティグルーさん、美しい湿地や人懐っこい動物たちと楽しい日々を過ごします。が、ある日、このまちに原子力発電所の建設計画が持ち上がります。それも建設予定の場所はペティグルーさんの湿地です。まちの人たちは、全員反対します。いつも物静かなペティグルーさんも「一度原子力発電所を作ってしまうと、使わなくなった後も何百年もコンクリートの墓のようなもので覆わなければならないようになってしまう、多くの生きものが暮らす湿地をずっと変わらず生かしてほしい。」

ときっぱりと発言をします。…はじめは、まちの人全員が反対でした。ところが時がたつにつれ賛成派が増え、最後まで反対しているのはペティグルーさんとマイケルのお母さんだけになってしまいます。

それから50年後、マイケルがふたたびこの地を訪れるところからこの物語は始まるのです。地元の男の人が言います。「…見渡すかぎり自然の湿地が広がっていたそう。それがぜんぶなくなっちゃった。きれいだったろうなあ。(中略)なんのために？数年分の電力のためにだ。そんなもんはとうのむかしにつかいきって、なくなっちゃった。発展の代償だと、連中はそういうだろうよ。…」

反対だったまちのひとが賛成派になっていく、その理由は書かれていません。マイケルが子どもだから、そういう話はわからなかったということなのでしょうが、私には、それがとても重く感じられます。

ブラッドウェルの原発は現在廃炉作業中です。

(遠藤)